
萌えっ娘もんすたぁ～少年と仲間達&嫁～

井の中の蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えっ娘もんすたあゝ少年と仲間達&嫁ゝ

【Nコード】

N4858H

【作者名】

井の中の蛙

【あらすじ】

この世には不思議な生物、萌えっ娘もんすたあ略して、萌えもんが住んでいる。その萌えもんを人々が保護し、生活の助けは勿論。より強い萌えもんトレーナーを目指し戦わせる者。そして、萌えもんと人間同士で愛が芽生え結婚などをして一生涯の愛人とする者。数々の萌えもんが生息するこの世界での、一人の少年の物語である。

例えるなら……遠足行く前の前夜みたいな。(前書き)

※これはポケモンではありません※原作を基盤として物語を作りました※苦手な方はお帰りください。

例えるなら……遠足行く前の前夜みたいな。

「ん……」

日の光が射し、まだ幼い顔立ちの少年は眩しそうに目を細める。

「朝……」

パツと、近くにある時計に目を移した。

「げ……もうこんな時間か……寝過ぎちゃった」

焦りの顔を作り、ボサボサに寝癖が立った頭を書きながらベツトから飛び降りる。

朝はそこまで強い方ではないが、別に今では気分は悪くない。寧ろワクワクしていた。

そのワクワクのせいで昨日、全く寝れなかったのだが。

「ああ、服服……。それとヘアバンド……」

少年は一人眩きながら、長い前髪を退かす為のヘアバンドを手取る。

そして、クローゼットを開けてこの日の為に整えていた服に着替えた。

「っし。後は髪と……」

服に着替え終え、自分の部屋を後にした。

「あら、起きたの？」

キッチンに向き合ってる年増……ゲフン、綺麗なお姉さん（笑）はこの少年の母親。

「うん、てか起こしてくれても良いと思うんだけど」

「昨日言っただじゃない。」

旅に出るんだから自分で起きなさいって。

そしたらあなたは

「余裕だぜ！」って意気揚々で言ってたくせに」

「……ぬう」

そう言われると何も言い返せない。

「さ、早く髪を整えてらっしゃい。

そんな髪じゃ、初めての萌えもんに失礼よ」

これ以上は分が悪いので、そそくさと洗面所へ向かっていった。

母が言ったとおり、今日は初めて萌えもんを貰い、萌えもんトレーナーになる日。

萌えもんトレーナーになるには、15歳になってからって決まっていた。

そして今日、俺は15歳の誕生日。萌えもんトレーナーになるべく、オーキド博士から萌えもんを貰いに行く。

こんなワクワクする日があるだろうか？おかげで全く寝れなかった。

「よし、こんなもんだろう」

水で濡らし、ボサボサだった髪を綺麗に整える。そして手に持っていたヘアバンドを、前髪を上げるように装着した。

リビングに向かう途中、鼻をくすぐるような良い匂いがした。同時に腹の方も悲鳴を上げるように鳴る。

「あらあら。凄い音。」

母はニコリと微笑みながらテーブルへ座るように促す。

「沢山食べなさい。もう当分、私の料理は食べなくなるんだから」

縁起でもないことを。

っと思いつながらも、料理、そして母に感謝の意を込めて

目一杯の

「いただきます」を言った。

料理を全て平らげた頃には、もう一刻の猶予も無いくらいに時間
間が迫っている。

「うわ。さすがにちよつとヤバいかも」

焦りの色を見せる少年。それをコーヒーを飲みながら落ち着いて
見ている母親。

そもそも、遅刻と言うものはあまり好きではない。好きな人はいないと思うが。

少年は急いで荷物を手に取り、玄関で靴を履く。
靴紐をしっかりと結び、準備満タんだ。

「じゃあ、母さん。
行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい。気をつけてね」

優しい言葉聞き、少年は晴れやかな顔で家を出た。

ポツンと残された母親。
家は静寂を保っている。

はあ、と息を漏らした。

「……あなた。遂にあの子も旅立たれましたよ。」

さすがあなたの子、旅立たれる時の顔があなたにそっくり

……あの子の無事を、祈ってください

……さて、また寂しくなるわね」

独り言のように呟き、母は部屋の奥へと姿を消す。

玄関には、一人の男性の写真が飾られていた。

第二話：俺が何か悪いことしたか？

「っておいおい……」

意気揚々と家に出たのは良いが、何やら顔に冷たい感触が伝わる。

「雨って……行き先悪いなあ……」

先行く不幸を呪いながらも、愚痴愚痴言ってたてしようがないのでとりあえず走り出す。

目指すは、オーキド研究所。

俺は今日、萌えもんトレーナーになる為オーキド博士から萌えもんを貰う。この時をどんなに待ち焦がれていたか。俺の親父は、萌えもんトレーナーだった。

おそらく、かなり優れているのだと思う。

小さい頃、旅に出た親父の事はあまり知らない。けど、母さんは親父の話題を持ち出すと

「凄い萌えもんトレーナーだった」と必ず言う。

凄い人、だから俺はそんな親父と会ってみたい。バトルしてみた

い。

だから、俺は萌えもんトレーナーになって強くなる。絶対に。

改めて自分の目標を確認していると、目の前に、正に研究所と言ったような建物が建っている。
これが、オーキド研究所。

自然と足が速くなり、心臓の鼓動も高くなる。
いや、走っているからかもしれないが。

「こんにちはー！」

オーキド研究所のドアを勢い良く開け、高ぶる気持ちを声で表す。
中にいた数人の助手は大きく肩を跳ね上げる。

助手は暫くこちらを見つめ、頭をぺこりと下げた後直ぐに作業へと移った。

どうやら忙しいらしい。

「邪魔しちゃったかな」と罪悪感を抱きながら、俺はこれ以上邪魔をしないように奥へ足を進めた。

奥には個室があり、そこに会うべき人がいる。

「こんにちは、オーキド博士。」

個室のドアを開けて顔を覗かせると、そこには老人が何やら難しい字が沢山ある紙を凝視していた。

「おお、マコト君。待っておったよ」

こちらの存在に気付いた老人は、ニコリと笑い近づいてくる。

「んで、今日は何で来たんじゃないけ？」

ド忘れしたような表情で、短髪に切られた白い髪が生えている頭を掻いた。

「……今日は俺の誕生日です。後は分かりますね？」

それを聞いた途端、開いた左手の上に拳を置いた。どうやら思
い出してくれたらしい。

「おお、そうか。今日はマコト君の誕生日か。いやあ、おめでと
う。早速パーティーと言いたい所じゃが、あいにく、今は忙しくて
のう」

「え？ いや、萌えもん貰う為に来たんですけど……」

それを聞いたオーキド博士はポカーンとした表情になる。

もしかして……。

この人……分かってない？

「……おお、そうじゃそうじゃ。今日でマコト君は15歳か。す
っかり忘れておったよ」

博士は呑気に笑う。

この人……ほんと大丈夫か？

「じいちゃん！」

俺に負けない位の大きな声で入ってきたうるさい奴。
姿を見た瞬間、苦虫をかじったような顔を作った。

「カイトか……？　そうじゃそうじゃ、わしが呼んだったな」

カイトと呼ばれた、俺と同年の少年。

こいつは、幼なじみの俺だから分かるんだが……何かと面倒な奴で。

「はぁ！　永遠のライバルのマコトじゃねえか。

お前も萌えもんトレーナーになるんだろ！？」　……俺の事をライバルとか言いやがる。ほんとに面倒だ。

年代も、ましてや生まれた日も同じとなると、腐れ縁、　とい

ったやつなのだろうか？

とにかく、面倒だから可能な限り放置してみる。

「……博士。早く萌えもんを下さい」

急かすように、俺は萌えもんを強要した。

速く欲しいと言うのもあるが、この馬鹿と速く離れたいというのもあったりする。

「まあまあ、そう慌てるな」

「そうだ。そんな慌てるんじゃない。萌えもんは逃げないぜ？」

……うぜえ。

「ほれ、これがお前達のパートナーとなる萌えもんじゃ。一人しか選べんからしっかり見定めろよ」

そう言ったオーキド博士の目の前に、横長い四角形のテーブル。

そして、その上に赤と白のボール、いわゆるモンスターボールが三つ置いてある。

この中に……萌えもんが……。

モンスターボールの中を覗き、感嘆の声を上げる

「……可愛い」

思わず口走ってしまった。いや、それ程可愛いから仕方がない。

「中に入るポケモンは、フシギダネ・ヒトカゲ・ゼニガメじゃ。どの娘も可愛いぞ」

「俺は大人だから、マコト先選べよ!」

カイトは偉そうに言った。

何故お前がそう言えるのかと突っ込もうかと思ったが、最初から三人選べるんだ。どっか引っかかるが、お言葉に甘えさせて貰おう。

「……んゝ……」

しかし悩む。どの娘も魅力的なのだから一人しか選べないとなると、数時間掛かってしまうかもしれない。

パツと、一人の娘に目が合った。その娘は直ぐに逸らしてしまっ
たが、俺はもう、その娘しか見れなくなってしまう。

ーうん、決めた。

「博士、俺はフシギダネにする」

「おおその娘か。

そいつは……元気が良いぞ……」

明らかに博士の反応がおかしかったが、そんなのは気にしない。
今はフシギダネの事で頭が一杯だ。

「じゃあ俺はこいつにしよう」

カイトは、あらかじめ決めていたような素振りで、他の娘には目もくれずヒトカゲを選んだ。

「博士、ありがとうございます。じゃあこれにて失礼します」

俺は、博士に深々と頭を下げて部屋から出ようとする。

「おい、ちょっと待てよマコト。せっかく萌えもん貰ったんだ。

バトルしてみようぜ！」

カイトは有無を言わず萌えもん、ヒトカゲをくり出した。

まだ俺、何も言っていないのに……。

まあ良い。萌えもんバトルには興味あったし、一丁付き合ってるか。

「行け！ヒトカゲ！」

放り出されたモンスターボールが眩い光を放つ。

モンスターボールが投げ込まれた場所には、萌えもん、ヒトカゲが現れていた。

「やー！マスター！バトルですね。このヒトカゲにお任せください！」

何て元気な娘だ。元氣すぎて思わず一歩引きそうになる。

さて、俺ものんびり見てる場合じゃない。

「よし！行け！フシギ……」

いや、待て……。

名前、決めてなかった……。

「あ……ううう……。

ル……ル……ルラ……。

……ルラ、ルラだ！

行け！ルラ！」

今、まさに思い付いた名前。

俺は、フシギダネことルラをくり出した。

第三話：成る程、これがツンデレか。

俺が投げ込んだモンスターボールが二つに割れ、強い光が差し込む。

投げ込んだ場所には、俺の選んだフシギダネことルラが威風堂々と立っていた。

こいつが……俺の萌えもん……。

この日をどれだけ待ちこがれていたか。俺は心が踊った。

「ヒトカゲ！ ひっかく！」

「はいなー！ マスター！」

カイトがヒトカゲに命令を下す。

つと、ルラに見惚れてて一步遅れてしまった。こちらでも早く命令しなくては。

「ルラ！たいあたり！」

ルラが覚えているだろう、技を叫ぶ。

これでルラは、ヒトカゲに全身全霊のたいあたりをぶち込み、ヒトカゲはノックアウト。

と、思っていた時期が俺にもありました。

「……………あれ？」

俺の叫んだ言葉は、小さい個室に響き渡るだけでルラは何も行動を起こさない。

しかもルラときたら、こちらを横目で見た後

「ふん」と鼻で笑うと来た。

ルラは、ヒトカゲのひっかくを軽い身のこなしで避ける。

その技を出した後の隙を狙って、ルラはヒトカゲにたいあたりを

くらわした。

「痛っ！」

ヒトカゲはまともにたいあたりをくらい、地面に転がる。

「ヒトカゲ！？大丈夫か！？」

「はい……マスター。まだ……いけます……」

「ヒトカゲ……」

ヒトカゲは強がっているが、おそらくまともにくらった上にかいしんのいちげきだったのだろう。

体はボロボロ、ひんし間近と言った状態。

次の瞬間、俺は目を疑った。

ルラが……ひんし直前のヒトカゲに、トドメを刺そうとしてる……！？

「止めろ！ルラ！」

俺は、今までに無い位の大声で制止しようとする。

しかし、それも空しく……ルラは、ヒトカゲにトドメのたいあたりをくらわした。

「ヒ、ヒトカゲー！?!?!」

カイトは悲痛の叫びを上げる。

ヒトカゲはたいあたりによって、更に体が吹き飛んだ。

吹き飛んだ体が地面に叩きつけられる前に、カイトはヒトカゲの体を優しく受け止めた。

「ヒト……カゲ……」

カイトは、今にも泣き出してしまいそうな顔でヒトカゲを見つめる。

「大丈夫、ひんしになっただけじゃ。直ぐに回復してやるから

待っておれ」

オーキド博士はなだめるようにカイトの頭を撫でると、モンス
ターボールに入ったヒトカゲを複雑そうな機械の中に入れた。

「あ……あ……あ……」

俺はただただ、ぼんやりと見てるしかできない。事沙汰となっ
た本人のルラは、何も起きなかったような無表情の顔で俺の横を
通り過ぎる。

「……ーっ！

待ちやがれ！ルラあ！！」

俺は、心の底から沸き起こる怒り全てを、言葉でルラにぶつ
けた。

個室から出ようとしたルラは足を止める。

「……萌えもんバトルである以上、俺は悪いとは言わない……」。

けどな！一言くらい謝ったらどうなんだよ！？」

個室にこだまする叫び声。あたりはシーンと静けさを保つ。

やがて、 声を発した。

「……何故謝る必要があるのです？

私はただ、バトルで戦った。それだけの事です」

俺の体の中で、 何かがぶち切れる。

「――貴様！」

「止めんかい！マコト君！」

もう少しで手を出そうとした瞬間に、 オーキド博士に制止された。

「……少し、頭を冷やすんじゃ、マコト君」

息を荒々しくした俺は、徐々に冷静を取り戻してくる。

「……博士」

「うむ……マコト君も気付いたとおり、フシギダネは性格に難ありじゃ。」

バトルの能力はかなり高いのに、な……」

「……………」

しばらく俺は、肩を落としたカイトに目をやる。

萌えもんバトルは……こんなに辛いものだなんて……。

俺はどこかで……舐めていたのかもしれないな。

「君が望むなら、もう一人の萌えもん、ゼニガメを渡してやるが……どうする？」

ゼニガメ……博士が進める位だからかなりの良い娘なのだろう。

もし俺がゼニガメを選べば、俺は苦労せずゼニガメを育てる事が出来る……。

けど……。

「いえ、俺はルラと一緒に旅に出ます」

オーキド博士は、驚いたように目を見開く。

無理もない。普通なら変えても問題ない位の問題児なのだから。

でも、ここで逃げたら……いけないんだ。

「……分かった。マコト君がそう言うのなら、わしは何も言わないよ。」

色々と苦難はあるかもしれない。しかし、君達の冒険は始まったばかりじゃ！さあゆけい！」

背中を押されるような、オーキド博士の言葉を背に歩き出す。

未だに肩を落としたカイトに近寄り、俺は申し訳無いと言う気持ちに満ちた声で

「すまない」と言った。

やがて研究所から出ると、既に小さくなる程まで遠くに行ったルラを見付ける。

ここに来る前までに降っていた雨も止み、空には虹が架かっている。

まるで、俺達を見送りするような感じがした。

第四話　そもそも運ってどう決まるのかね？（前書き）

グダグダと長く書いてしまいました。書きたいこと書いた結果がこれだよ！プロットがどれだけ大切か分かりました。

第四話　そもそも運ってどう決まるのかね？

「おい！ルラ！待てよ！」

俺の呼び掛けを悉く無視ムシをするルラ。

「ルラ！！！」

やっとの事で追い付き、ルラの前に立ち塞がる。

「……何で、俺の命令を無視するんだ？お前は俺のパートナーだろうが」

「……私は、貴方のパートナーになった覚えなどありません。それと、気安く私に名前など付けないでください」

……こいつ……。

「……確かに、お前の了解を得ず勝手に名前を付けたのは謝る。

俺の萌えもんでは無いと言うのも、百歩譲ってやる。

けど……お前、どこに行く気だ？まさか野生に戻るとか言わせないぞ」

オーキド博士は言った。

「フシギダネは……もともと野生の萌えもんだった。

わしが歩いてると、フシギダネがボロボロの瀕死状態で倒れていてな。わしは即座に応急処置のきずぐすりを使ったから大事に至らなかったが……。

おそらく、あの傷は他の萌えもんにつけられた傷であろう。その時の何かが原因で、フシギダネは心を閉ざしているのかもしれない。それを無理に開くのが、お前の、萌えもんトレーナーとしての、フシギダネのパートナーとしての仕事じゃ」

と。

もし、オーキド博士の言ってることが本当ならば、フシギダネは身体だけではなく心も傷ついてる。そして今、フシギダネが歩く理由は、自身を傷つけた萌えもんへの復讐って所か。

復讐は、良くない。復讐は復讐を呼び、連鎖が起きる。

「……何をしようと、私の勝手です」

「そうは行かないね。

俺は、あんたが俺のパートナーだと思ってる。そのパートナーをほっとくなんて出来やしない」

「……矛盾……してません？」

「してないさ。あんたは、俺の事を何とも思っていない。

けど、俺はあんたをパートナーだと思ってる。な？」

「……くだらない」

ルラは、俺の横を通り過ぎようと歩き出す。

「どうしても……俺の言う事が聞けないか？」

「しつこいです」

「そうか……」

諦めたように、俺は溜め息を吐きポケットに手を入れる。しばらく探るように動かした後、ポケットから手を抜いた。

その手の中にある物、それは……。

「ルラ。これなーんだ？」

俺は、勝ち誇った顔で見せびらかすように見せ付ける。

「……それは……！？」

ルラは表情を一変。さっきまで涼しい顔をしていたが、それを見せ付けられ驚いた表情になる。

俺の手の中にある物、それは、ルラが入っていたモンスターボール。

中に萌えもんが入っていなければ、元々手のひらサイズが更に小さくなるという便利な機能と、

何があるうと、モンスターボールに入っていた萌えもんは一瞬でボールの中に戻る。

「あんまり強引な事はしたくなかったし、この中は窮屈だろうから使いたくなかったけど、ここまで言う事を聞かなかったら……仕方がないよな？」

「くっ！卑怯も……」

ルラの言葉が最後まで続かない内に、俺はモンスターボールの真ん中にあるスイッチを押す。

すると、モンスターボールは本来の大きさに戻り、ルラの方へ勝手に飛んでいった。

やがて、ルラ目と鼻の先まで行き、モンスターボールは開く。

それと同時に、ルラの身体は光に包まれモンスターボールの中へ入っていった。

「……むー……」

ルラが入っているモンスターボールが戻ってきたのを手に取りながら俺は唸る。

ルラは予想以上に言う事を聞かない。このままではバトル所か共に旅する事も難しいぞ……。 「……………はぁ」

どうして初っ端からこんな試練が起きるんだ……後先不安だな……。

とりあえず、　こんな所で立ち往生もなんだし足を進めよう。

進まなければ何も始まらないしな。

マサラタウンの北方向にニビシティと言う町がある。そこにはジムリーダーがいるとの事。

今の、　言う事が聞かないルラでは勝てないだろうけど、　途中で野生の萌えもんを保護すれば全く勝てないというわけではない。

ニビシティに行く道程の途中、　トキワシティという町がある。

そこで道具が売られているショップがあるので、　保護用のモンスターボールを買っていこう。

所持金も、　それなりにあるしね。

「……わっすれてた……」

マサラから出て数分、　俺はすっかり忘れていたことがある。

野生の萌えもんが出る草むらがあるということ。

「参ったな……」

野生の萌えもんが出た場合、こちらも萌えもんで対抗しなければならぬ。

今、俺の手持ちは全く言う事を聞かないルラだけ。

そんなルラを出してしまえば、隙について逃げてしまうかもしれない。

「……走る……かなあ」

会わない為には、それしか方法は無い。仕方がないのだ。

「っはあはあはあ……！」

膝に手を付いて息を乱しながらも、運が良かったのか萌えもんと出会さなかった。

「……付いて……るのか分からねえ……」

正直複雑だ……主に手持ち的な意味で。

とにかく、息も整った事だしショップへ直行だな。

トキワシティの右下辺りに、青い屋根で看板に

「shop」と書かれてる建物。無論、その名の通り道具を扱っているショップだ。

ショップには色々売られている。

ボール、きずぐすりは勿論。他にまひなおし・ねむけざまし・やけどなおしなどがある。

聞く話によると、町によって商品も変わるらしい。と言っても、マサラとここ、トキワのショップにしか行ったこと無いのだが。

「おじさん、こんにちはー」

ショップのドアを開けて、見慣れた顔に挨拶をする。

「おや？マコト君？一人だなんて珍しいね」

俺はカウンターに身を乗せながら話を続ける。

「いやー、やっと萌えもんトレーナーになることが出来たんだよー」

「あー、そうかー」

マコト君、もう15歳かぁ。いやぁ早いねえ」

「ははは、何か年寄り臭いですよ」

「嫌だなあ。僕もまだマコト君に負けないよ。

僕もマコト君ぐらいの時はね……」

「それが年寄り臭いんですよ。

そんなことより、おじさん。モンスターボールください」

「そんなことって……」

おじさんは、悲しい顔を作りがっくりと肩を落とす。

「……そうだ。マコト君、ちょっとお使いに行ってくれないかな」

急に思い立ったのか、おじさんは尋ねてくる。

「……はぁ？何で？」

「またオーキド博士に会うんでしょう？だったらこれを届けて欲しいんだけど」

そう言ったおじさんは、カウンターに小包を置いた。

「えー……」

正直、めんどくさかった。

けど、お使いを済ませないと商品を買うことが出来ないみたいだし……。

「……分かりましたよ。行きます」

俺は渋々承諾する。

「ああ！ありがとうマコト君！助かるよ！」

「オーキド博士に届ければ良いんですね？」

「うん、よろしく頼むよ」

ショップから出て、俺はまた溜め息を吐いた。

溜め息の数だけ幸せが逃げると言うが……まさかこれが原因じゃないかな？

……運、無さ過ぎだもんなあ。お使用とか。

次々と溜め息が出て来る。足取りは重くなる。

そんな中、俺はマサラへと戻るのであつた。

第四話　そもそも運ってどう決まるのかね？（後書き）

むむむ……中々話が続きません。書きすぎても良くないですね。

評

価&感想を下さった方々、ありがとうございます。とても嬉しいです。

まさか一ペー

ジ目で感想を下さるなんて、「萌えもんって愛されてるんだなあ」
って実感しました。ええ、自分も好きなんですが。

そ

れでは、今日はこれで。

第五話　もう嫌だこの旅。

「オーキド博士……」

「おおマコト君！どうしたんじゃ？」

マサラまで戻った俺は真っ先に研究所へと向かう。

あいからわず忙しそうな助手達を尻目に、　オーキド博士がいる奥の部屋に足を進めた。

そしてこの言葉である。人の苦勞も知らずに。

「……トキワシテイのショップのおじさんからお使いを頼まれたんですよ」

「……おお、そうじゃったなあ！」

……そろそろボケてきてるのではないのだろうか。

「いやあ、すまんかったなあ……そうそう、マコト君に渡しておきたいものがあったなあ……」

そういつてオーキド博士は置くにあるテーブルの上にあるものを手に取り、こちらに持ってきた。

「・・・これは？」

オーキド博士から直接手渡されたもの、それもまじまじと凝視する。

「ふふふ・・・これはな、もえもん図鑑というのじゃあー！」

拳を天へと突き上げ誇らしげに叫ぶオーキド博士。それを横目で見る俺。

もえもん図鑑・・・これがねえ・・・。

以前、博士が偉大なる発明品を開発したって聞いたけど、これだったのか。

これがあれば、図鑑の先端に付いてるカメラにもえもんを映すだけで詳細が分かるんだっけな。

「わしも君らみたいに若ければあちこちをまわって、まだ未完成なこの図鑑を完成させるのだから・・・わしももう年！」

そんな無茶はできん！だから君たちがこの図鑑を完成させてくれい！」

なんだ、年をとってるのは自覚してるんだな。

図鑑完成・・・ねえ・・・。

まあ、色々なもえもん見てみたいし、うん。

「分かりました博士、手伝いますよ」

「おお、マコト君！ありがとうございます！」

博士が勢い良く抱きつこうとするのを俺は華麗に避ける。

ふと、あることに気付いた。

・
・

「博士？君達って・・・？」

君達――俺だけではない？

俺が言葉を発した瞬間、博士の表情は曇る。

気まずそうに口をもごもごさせながら、まるで消えてしまいそうな声が聞こえてきた。

「・・・・・・・・カイトのじゃよ」

・・・あ。

そうだ、あいつも俺と一緒にトレーナーになったんだ・・・。

博士の孫、だから言い辛そうだったのだろう。

・・・あんなことをしてしまった以上、あいつに会わせる顔が無いな。

「・・・博士、あいつにぐめんと伝えてもらえないでしょうか？」

「ふむ・・・分かった、確かに伝えとく。だが、わしの孫じゃ。そう弱くはないよ」

俺は力無く笑う。研究所の個室に重い空気が漂った。それを断ち切るようにゴホンと、博士は咳払を一つした。

「さて、マコト君。君は色々な所を旅して貰う。

旅の途中、苦難や壁にぶつかるだろうが、それをパートナーと共に乗り越えることが出来れば君は大きく成長することが出来る。

図鑑完成など後回しで良い。無事旅から帰り、成長した姿をわし達に見せてくれ！」

博士の、今まで聞いた事の無いような声量での思い。俺は自然と身が締まる。

「はい！」

だから俺も、力強く返事をした。

背中で博士の見送りを感しながら外に出る。

博士の言ったとおり、この旅の途中、色々な苦難や壁にぶつかるだろう。

それでも・・・そんなものに負けないでやってやる。

今――俺の旅が始まった。

第五話　もう嫌だこの旅。（後書き）

お久し振りです。蛙です。

正直言います。サボってました。ごめんなさい。
というわけで久し振りの更新です。

気付いたか分かりませんが、今、PCで執筆しています。

更新してない間、色々ありまして、はい。やはり慣れないと難しい
ものです。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858h/>

萌えっ娘もんすたあ～少年と仲間達&嫁～

2010年10月11日05時32分発行